

ヨシちゃん
ひとりごと



中・韓・首脳

被災地訪問

5月 21日 中国の

温家宝首相と韓国李明博大統領が仙台に到着、東日本大震災の被害地を訪れられ犠牲者に献花、被災者を激励され、夫々の国の人々が日本の災害の被害を心配していると話されている報道を見ました。



倒壊した宮城県連協関係支所の前で献花する中国の温家宝首相＝21日午後、宮城県名取市の朝上車市場(代表撮影) (時事)

知りました。これと同じような話、行動は無数にあったのでしよう。

温家宝首相は女川町で中国人実習生を津波から逃がし自らの命を落とした「佐藤充さん」の行為に謝意を述べられた。女川町の水産会社に約160名中国人が働いていたが1名の死者も無かったのです。韓国・李明博大統領も避難所の床に正座して慰問の言葉をお掛けになっている姿、幼児を抱き上げる映像も流れた。

先に訪ねられた、皇室の方々の、震災犠牲者への哀悼と被災者へのお心配りと励ましのお声をお掛けになる姿も報道されました。

あの大地震の最中、南三陸町の防災放送で「6メートルの津波がきます。高台に逃げてください」と冷静で聞きやすい声で放送を続け、命を賭した新婚間もない24歳の遠藤未希さんの遺体が、同町の沖合いで見つかったと報道で

その一方で腹立たしい映像も多く流れました。被災地訪問で腰に手を当てたまま、形ばかりのお辞儀をした人(お名前伏せませす)。最高責任者が原発事故発生後に中々表に現れず、経過や現状報告を無機的に伝えるだけで、その対応をどうすると言わない東電の担当者の姿勢等々です。

でも、それらは少数派で、多数の日本人は全国津々浦々で被災者支援を始めています。その姿は大災害の中での日本人の冷静沈着な態度と共に世界中に伝えられ、日本の評判が良くなりました。

「自己中」という言葉が流行り「他人ことには関りたくない」風潮が増えた最近ですが危機的な状況の下で、消えかけていた日本人の古い良い遣伝子が蘇った感です。

日本人は豊原瑞穂の国と呼ばれた古代から「血縁地縁」

を大切に田植・盆踊り。お祭り等々「つながり」を大切に生きてきました。

先の敗戦後の復興も日本人たちの「つながり」の成果です。「つながり」が、この悲惨な大震災を契機に、それも中韓・世界を巻込んで「復活」できるならば、平和な地球になるチャンス。災い転じて福となる！と信じたいものです。

4ページの解説

朝日麦酒株式会社 特約代理店制度



先日の戦争中の日本の麦酒会社は大日本麦酒(株)と麒麟麦酒(株)に二社になり、ラベルは「麦酒」字のみ、配給配送も一社でされていた。製造量は「大日本」が全国シェア75%だった。戦後(昭24)「大日本」は90%の「経済力過度集中排除法」で、現在のアサヒビールとサッポロビールに分割され、名古屋西は朝日(アサヒ)・東は日本(後サッポロ)販売地域も分けられ、全国区からローカルメーカーになった。当時キリンは25%。だが、このときから全国区になった。関西基盤で圧倒的シェアの朝日麦酒は、「酒卸店」に他

お詫びとお知らせ
今年12月からは四月まで5回連載の「日本古代史の謎」は5月に関係なく法律(契約)に縛られ号で連載をストップ致し、これ投稿いただいている清水克彦様のご専門「保険の話」を今号から連載していただくことになりました。同様に勝手なお断りをしたことが深くお詫びいたします。是非お読み下さい。 編集者

その対策として「ビール王」といわれた朝日麦酒(株)初代社長山本為三郎氏は、1957年(昭32)3月、戦後初の新ビール「特製アサヒゴールド」(発売3月・翌年日本初缶ビール発売)を世に出された。販売前の「特約店発表会」が吹田工場であり、社長のお話と「ゴールド」を試飲した私は、この味なら「特約店に厳しい仕入条件」でも麒麟を押し替えることができると確信した。当時の交流が増え、ローカルになった二社は苦戦する様になる。三菱系列の麒麟の販売政策は「支払・値段」に厳しく、酒問屋間の得意先奪いあいにも介入し過当競争を押し上げた。(業界では当時「ケチンビール」という人もあった)更に三菱系列各社が応援に総力を上げた。1955年(昭30)ころからビール販売量は急上昇、が、西日本で圧倒的に強い「朝日」のシェアは下がりだした。

その対策として「ビール王」といわれた朝日麦酒(株)初代社長山本為三郎氏は、1957年(昭32)3月、戦後初の新ビール「特製アサヒゴールド」(発売3月・翌年日本初缶ビール発売)を世に出された。販売前の「特約店発表会」が吹田工場であり、社長のお話と「ゴールド」を試飲した私は、この味なら「特約店に厳しい仕入条件」でも麒麟を押し替えることができると確信した。当時の交流が増え、ローカルになった二社は苦戦する様になる。三菱系列の麒麟の販売政策は「支払・値段」に厳しく、酒問屋間の得意先奪いあいにも介入し過当競争を押し上げた。(業界では当時「ケチンビール」という人もあった)更に三菱系列各社が応援に総力を上げた。1955年(昭30)ころからビール販売量は急上昇、が、西日本で圧倒的に強い「朝日」のシェアは下がりだした。

忘れられた東山区
ヨシちゃん

タイムスリップ

「市電が走った街」福田静二様(今号このページ掲載)のご投稿に「現東山武田病院は(昭和29年)妙法院が積翠園の敷地を含めて専売公社に売却、その後出来た京都専売病院を引継いだ」と書れている。

もう57年前のことである人も少ないが、当時東寺付近(?)に有った「専売病院」が手狭になり、移転のため専売公社がその場所を選んだ。病院の患者は(当時)職業的に結核患者が多いと言われ校地が隣接する「修道小学校PTA」等の「専売病院移設反対」運動が起こった。ヨシちゃん(19歳編集者)もそれに参加していたので「馬町」の文を読みパツと記憶がタイムスリップした。当時、現東山診療所は修道校区内に有り、診療所を拠点にした「東山日曜会」社会科学勉強会「や」ともいび会「コーラスグループ」も反対運動に参加、「会」の一員であった私も「結核病棟反対・名園積翠園を潰すな」の地

域の運動に(ピラ貼りピラ撒き講演会)加わった。その結果「結核病棟はつくらない・積翠園は保存する」条件で病院開設を認める地域協定が結ばれた。協定は今も生きていて今後も護られると関係者から聞いた。歳月は皮肉、今の私は「反対した病院」の患者。毎月通院している大切な病院である。福田様の写真は、既に専売病院が写っているので昭和30年代のものであろう。今は市電軌道は無いが他の風景はその頃

市電が走った街 京都を巡る 福田静二



「東山七条」から東山線を北へ向かいます。左手に京都国立博物館、東山区役所(当時)、右手に妙法院、専売公社病院(当時)を見ながら、電車は北上します。東山区役所は、その後、五条坂上ルの東山区総合庁舎へ移転します。専売公社病院もその後、武田病院となりますが、敷地内には、平重盛邸宅跡と言われる庭園「積翠園」があります。最近のニュースでは、病院に代わって、三年後を目指して、フォーシーズンズホテルが建てられるとか。世界的な高級ホテルが、この地にできると

馬町交差点付近まで来ると民家・商店が多くなる。



雪の日、妙法院の前を行く市電。



と同じ。蜘蛛の巣状態の電線が絡みついた電柱(写真)狭い(歩)道に電柱・電信柱がデーンと突っ立っている。東山区は風致景観保全地区が広く、高さや色にも厳しい規制がある。地図上で線引きはしたが、これが何故「風致地区」と思える風景や町並みも多々ある。風致の「枠」だけ決めた後は(他区比較で)「忘れられていて」ように思える。高齢者率ナンバーワンの東山。坂道が多く、社寺仏閣で

分断され三条、七条は直線通しで、街道の雰囲気の色濃く残っていました。渋谷通を西へ入ると、市電が走っていた頃は、清水焼の登り窯が多くあり、まだ黒い煙が上がっていました。その後、山科などの郊外へ窯は移転してしまい、今では、河井寛次郎記念館が唯一、その面影を残しています。馬町付近でもうひとつ記憶にとどめておくべき事象として、馬町交差点東入る南側は、第二次世界大戦で、空襲にあつた場所です。空襲が無かつたと思われる京都にあつて、もうひとつ空襲を受けた西陣地区とともに、戦争の歴史を刻む場所でもあるのです。

さて、市電の通る、東大路通は、明治の頃はごく狭い道でした。明治末期から大正にかけて、京都では、大規模な都市計画が全的に実施され、幅の広い道路が市内縦横に造られました。その道路中央には、近代化の象徴とも言うべき、市電の軌道が敷かれたのです。この例は、東大路だけでなく、四条、烏丸、千本、大宮通なども、同時期に出来た道路です。現在も、京都の道路の代表として機能するこれらの道路は、実にこの明治末期の先見の明から生まれたものでした。

酒屋で生きて生かされて

第五十八話

酒屋の黄金時代

1950年(昭25) 個人経営酒屋卸業「酒谷本店」がスタートした。酒卸(乙)免許は酒小売店のみ販売する条件付。(1973年昭48解禁)「飲食業」併業不可で、戦前からの酒場も酒小売も辞めて開業だ。最盛期八店舗あった「神馬酒場」も知り合いの酒小売店に納入を依頼した。

米の配給制度は壊れかけていたが酒と共に統制は続き、米は農林省・酒は大蔵省の僕のような状態だった。酒業界も農民もそれを良としていたと思う。歳月重なり今や酒屋米屋は激減、農業人口も減ったが名は変わっても役所は健在、酒税より美味しい消費税が出来たから今は知らんぷり状態。それはさておき、戦時中公団などで三つに絞れていた京都酒卸店が二八店になりその後も増えて1971年(昭46)には京都滋賀合わせと三六店になっていった。(現在は九)

「アルコールの水割り」か密造の「ドブ酒」で酔うことになる。その(日本)酒不足時代活躍したのが、米を使わずに清酒に似た「合成酒」。1966年(大8)ビタミンの研究で世界的に著名な鈴木梅太郎博士が開発、戦後「利久」の名で販売された。父はその販売権を得、更に宝酒造(株)出身の加藤弁三郎氏が設立した協和発酵とも「焼酎」のお取引が出来た。清酒は祖父の代からの取引の「菊正宗」他・ビールは「ユニオン」を扱っていたことから「朝日麦酒(株)」の特約代理店(注2)になった。

余談であるが卸開店時お得意先の酒小売店様に挨拶品としてお配りした61年前の「協和・利久」の名人「酒屋袋」を「私のルイビトン」と称し今も愛用している。私同様丈夫だ敗戦で海外引揚者もあり「飲酒人口」急増したが、米不足で酒は造れる量は制限されている。灘・伏見の酒どころの酒だけでは足りず、滋賀県三重県などの酒を集め小売店に廻した。まだ千円札しかない時代、父と店の二人が満員の山陰線に乗り、現金を胴巻きに入れ鳥取の酒蔵で小売値段で貨車2台分買いに行つた事もある。小売値で買つて卸値で売るので損になる。そこでその酒と同量の「合成酒」を買つて条件付で希望する

小売屋さんに売って「帳尻を合わせる」のだ。ワム貨車2台分は予約で完売した。今や時効だが、酒小売店は、その両方を混ぜて「清酒」級として販売したのだ。小売酒店段階でのその行為は酒税法上は違反だ。だが戦時中から酒蔵で三増酒が造られてきた。それを知っている酒業は、同じ事との感覚だっただろう。が、酒小売店の儲けも「三増」したのは事実だ。正に酒屋の黄金時代であった。この文は今月・日経掲載・瀬戸雄三様「私の履歴書」に諸触され急に変更した。ことがあります。



知らない損をする

保険の話

清水克彦

事例にもとづいて順次説明していきたいと思います。

今月は身近で興味のもてそうな目次を述べておきましょう。

- ・ 保険金請求が出来るにもかかわらずに多くの契約者が請求していない場合
- ・ 家財の火災保険における
- ・ 建物の火災保険における
- ・ 建物の毀損
- ・ 医療保険はよく考えたら

必要なのではないか? 200日もしくは90日限定入院で受け取れる保険金と、終身支払

相続料を比較してみれば、相続に対処する上で終身保険は有効な手段たりうる。

相続税非課税枠があり、しかも現金が相続で膨らむ生命保険は最高の金融商品であると言つても過言ではありません。

人名義の家屋と預金等は、ご主人が亡くなった場合、奥様は全部ご自分の物になると思っておられませんか?とても難しい問題が発生することが少なくありません。生命保険は有効な手段を提供します。

相続人が認知症となった場合遺産分割協議をするために成年後見人を選任する必要が生じる

相続放棄をしながらも、いまいましい建託会社や銀行に「矢報いる方法がないか?」生命保険を活用します。母子家庭において受取人を子供にするのは(良くない)です。

編集後記

小売業は

一次〜二次商圏に住むべきだと知りながら16年前宇治市に転居、店に通って仕事に携わってきた。往復約80分車を運転して通い続けたが「夜道」は対向者のライトが眩しく危険を感じだした。商売も競争や景気悪化で厳しい時代になった。店の近くに帰ろうか思っていた。社長は退いたが、あと3年で祖父母が開いた「店」。その百年を二人と父を知る私も元気で迎えるか決めている。その百年、祖父は32年、父29年、私は今年36年大分担と、あと3年することになる。破産寸前の危機が二度。他社の支援を受けた時もある。

それを乗り越えられて今に至る間、地域の、ご縁の有る方のご支持とご支援を戴いた。ファミマの24年の延客数は東京都の人口を越すだろう。協力してくれた社員やパート・パートの方々の力も大きい。仕入先やコンビニ本部、同業の友人、色々なご縁で知り合った方に支援を戴いた。好・不況。大小に限らず、潰れる店も有るが残る店も多い。わが店は残れる店でありたい。大きな儲けは望んでいないが損が出れば潰れる。阪急(河原町)はマルイ。近鉄はヨドバシ。大は儲からな

いと交替。暫くは残念や淋しいの聲が聞こえたが、今はそこへ行く人が増えた。我は何処へも行先なしは、ここで頑張るのみ。お客さん次第だが。